

# Tokyo GENGETSU

東京弦月会会報 No.25 2018年7月

## 第36回 東京弦月会同窓会・総会

平成30年8月25日(土)  
16:00～19:00  
帝国ホテル 富士の間



青島と鬼の洗濯板

表紙写真提供: <http://miyazaki.daa.jp/>

東京弦月会HP <http://www.gengetsu.ne.jp/>



## 母校の130年に寄り添って 「明治は近くありにけり…！」

■ 会長 藤田 洋一（12回生）

宮崎大宮高校は本年、創立130周年を迎えました。

母校130年の歴史は、明治21年（1888年）に設置認可された尋常中学校に源を発します。

ふるさと宮崎県が誕生したばかりの頃です。宮崎県の誕生が難産だったことは、皆さんご存知ですか。明治4年11月、明治新政府による廃藩置県によって大淀川を境に南を都城県、北を美々津県とされます。そして明治6年にはその両県が廃止統合され宮崎県が誕生します。ところが明治9年8月、太政官布告による行政整理で鹿児島県に併合され消滅してしまいます。県民にとって、まさに目がテンの出来事です。さあどうしたものか…？

思案投げ首の県民に更なる災難が！

翌、明治10年、県民最大の悲劇と言われた「西南戦争」が勃発。薩軍と官軍の戦火は郷土全域に拡がり、県民のなかには身内同士が敵味方に分かれて戦わざるを得ないという悲惨な状況も起きたといえます。

この戦役で戦死者は両軍合わせて1万3千人余りに及びました。多くの県民の犠牲がありました。

郷土が被った損害は甚大で、戦いが収束した後、県民の不満は否が応にも高まります。そうした不満が明治13年から16年にかけて「分県運動」に繋がっていきました。

県内各地で宮崎県再配置推進の大会が開かれ、請願書を県令に、建白書を元老院に提出するなど東奔西走の活動が実を結び、明治16年5月9日、政府の布告により鹿児島県議会にて宮崎県再配置が決議されたのです。江戸から明治へ生まれ変わる時代の激流に翻弄された郷土の人々の哀歓を遙かに想えば一人の感慨を禁じ得ません。

再配置からわずか5年後に母校の前身「県立宮崎中学校」が誕生しました。設置認可に尽力された人たちや学校の教師、職員の多くは西南戦争を体験されていただろうと思うと、明治の日向人の揺るがぬ精神と気骨を覚えます。

明治39年（1906年）のことです。ポーツマス平和条約締結の大役を果たした外交官・小村寿太郎が帰国後に宮崎中学校で講演を行いました。生徒たちは日露戦争の話や大ロシアとの会談の様子など雄弁な語りを期待して待っています。

壇上に登った寿太郎は「諸君は正直であれ。正直ということは何よりも大切である」。諭すようにそれだけを話すと演壇を降ります。「伝説の1分訓話」として知られたエピソードだそうです。

小村寿太郎の人生を貫いた信念は「正直と誠」だったと言います。

この短いスピーチは生徒たちに強い印象を残しました。

「正直であれ！」改まって言われると、なにやらズキンと来るものがありますよね。恥ずかしながら私なんざあ、本音と建前を使い分けて、あっち行きこっち行きして世の中渡って参りましたので…ハイ！

母校の歴史は私たちの歴史でもあります。歴史には、その時代の世相や事象、人々が映し出されています。母校の130年を想うと、先人から受け継いできたバトンを、今、未来の母校を支え新しい歴史を紡いでいく若者たちに繋げていかなければなりません。

明治は決して遠くなんてはいません。今も私たちのすぐ傍で息づいています。

先人が立ち上げた志を伝え、育てていく責任が私たちにはあります。

「ほんとうに大切なことは時の流れがおしえてくれる」

130周年を機にその想いを新たに致しましょう。